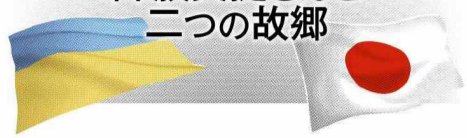


# 戦禍を逃れて

## 降旗英捷さんと二つの故郷



晴れやかな夏空の下、旭川市内の家庭菜園で高齢のきょうだいが畑作業に精を出す。畑の主、畠山レイ子さん(70)が「土が乾いているわね」と気にかけている降旗英捷さん(78)が「分かったよ」とにこやかに水をやる。何げない日常。2度の戦争に人生を翻弄された降旗さんにとって、それは心から願っていたことだった。

ロシアによる侵攻で、50年以上暮らしたウクライナから旭川へ緊急避難して4カ月あまり。自身と同じサハリン残留邦人のきょうだい5人は1999〜2009年にかけて帰国し、国外で暮らす最後の1人となっていた。降旗さんは「子どもたち全員が日本に帰ることができ、喜んでくれていてほしい」と言い、サハリンで眠る両親に思いをはせた。

# 極貧、強制移住 望郷募る父母

## ① サハリン残留

終戦は1歳のとき、日本統治下にあった樺太(ロシア極東サハリン)南部の漁村ユージヌイ(札幌)で迎えた。長野県出身の父利勝さんは、旧通信省が管轄するアニア岬(中知床岬)灯台の標識技手。引き揚げ船

を最後の1隻まで見送った。帰国できず、一家は残留を余儀なくされた。村には旧ソ連兵が駐留し、利勝さんは独学でロシア語を習得して魚の加工場で働いたが、低賃金のため一家は極貧。母ようさんはジャガイモを植えたり、フキを採ったりして食料を確保したが「生活は厳しくつらかった」と振り返る。

一家は1953年にポロナイスク(敷香)へ移住させられ翌年、旧ソ連国籍を取得した。帰国の見通しが立たず、生活基盤を整えるための苦渋の選択だった。望郷の思いを抱えていたよ

うさんはハレの日には着物姿でまちなに出て、「道行く人が母を立ち止まらせて眺めていた」と懐かしむ。

56年には日ソ共同宣言が結ばれ、日本とソ連の国交が回復。49年の引き揚げ終了時点で降旗家のような残留邦人はサハリンに約1500人いたため、57年から2年間、集団帰国が行われた。利勝さんは製紙工場で電気技師として働き続けた。優秀な技術者だった父を見習い、降旗さんも61年、同じ工場に就職した。職場の派遣で入学した大学でウクライナ出身の女性と出会い結婚。71年に長男を連れてウクライナに移住した。



妹畠山レイ子さん(左)の家庭菜園で野菜に水をやる降旗英捷さん(7月9日)(西野正史撮影)



生まれ故郷の日本と、半世紀を過ごしたウクライナ。「故郷」と呼ぶ二つの国で戦争を体験したサハリン残留邦人の人生から、戦争が市民やその家族に及ぼす影響を考える。(山口真理絵が担当し、3回連載します)

78年に利勝さん、91年にはようさんがポロナイスクで死去。「2人とも日本へ帰ることを夢見ていたが、運命は別の人生を用意していた」。戦争によって波乱の人生を終えた両親。ただ、降旗さん自身も再び戦禍に巻き込まれ、「第一の故郷」を追われることになる。

# 戦禍を逃れて

## 降旗英捷さんと 二つの故郷



ロシアによる軍事侵攻が続くウクライナでは、病院や学校、集合住宅など市民生活の拠点がミサイル攻撃を受けている。国連によると、2月24日の戦闘開始から少なくとも5千人以上の市民が命を落とし、1千万人以上が国外へ脱出した。

「多くのまちが破壊された。兵士だけでなく、子どもたち、罪のない人たちが犠牲になっている」。親族を頼り、ウクライナから旭川市へ緊急避難した降旗英捷さん(78)の目に悲しみが浮かぶ。

ロシアは昨年3月以降、ウクライナとの国境地帯で軍備を強化してきた。そうした情報はウクライナ国民にも伝わった。半世紀以上北西部の都市ジトーミルで

暮らした降旗さんは、近隣住民に出会う度に「ロシアは攻めてくるのか」と聞かれた。「この時代にまさか、戦争なんて起きないだろう」と聞かされた。

しかし不安は現実となった。2月末、郊外のターチヤ(菜園付きの別荘)へ向

### ④ ロシアの侵攻

かう道すがら、病院や産院にミサイルが撃ち込まれたのを目の当たりにした。建物から火の手上がり、消防士らが消火活動に当たっていた。空襲警報は1日数回鳴り響き、まちは不穏な空気に包まれた。

(18)らと一緒に日本へ避難するよう促された。大きめのスーツケースに、上着や靴、思い出の写真を急いで詰め込んだ。6日に出発する予定だったが、自宅近くのアパートがミサイル攻撃に遭い、急きよ5日に前倒

# 病院にミサイル不安現実



旭川空港に到着し、出迎えた妹春美さんと抱き合う降旗さん(右) 3月20日(諸橋弘平撮影)

ウクライナは「第2の故郷」だ。機械製造工場で技術者として働いて家族を養い、年金生活となっても「仕事なしではいられない」と、70歳になるまで地元の修道院で建築や電気、衛生設備の管理を引き受けた。

60代のころは日本への永住帰国を考えたが、病気がちだった妻に「言葉も分からないし、もう歩けない。最後までウクライナにいたい」と頼まれ、諦めた。地域には工場仲間など、知り合いも多い。19年に妻、21年に長男をみとった後も、菜園と自宅を往復し、仲間と語り合う日々が続いた。

その国で命の危機にさらされた。3月4日、孫アニスさん(30)から、デニスさんの妹ウラジスラワさん

シトーミルから隣国ポーランドとの国境まで約400キロ。平時なら車で7時間だが、渋滞と車の故障で3日かかった。首都ワルシャワに到着後は1週間、避難所で過ごした。NPO法人日本サハリン協会(東京)の支援や募金で帰国の途に就き、20日に旭川空港にたどり着いた。

出迎えロビーには札幌市内で暮らす妹の婦美子さん(72)や春美さん(68)らの姿があり、再会の喜びをかみしめた。「ジトーミルを離れるのはつらかった。ウクライナのことにはニュースを見る度に心配です」。降旗さんはテーブルの上に並べた家族や仲間の写真を見つめた。

# 戦禍を逃れて

## 降旗英捷さんと 二つの故郷



東川町の町立日本語学校でサハリン残留邦人の降旗英捷さん(78)が、平仮名で書かれた日本語の文章をゆつくり読み上げる。「きんよつびは 6じまで はたらきます」。講師を務める町の国際交流員が「素晴らしい」とロシア語で声をかけ、意味を説明した。

戦時下のウクライナから出国した降旗さんは、旭川市に避難して4週間ほどたった4月中旬、永住帰国の意向を表明。道内にはサハリンでの貧しい子ども時代を支え合った長兄信捷さん(80)と稚内在住の姉や、妹たち3人が生活している。「きよようだいの側で暮らしたい」。そんな気持ちに傾いた。

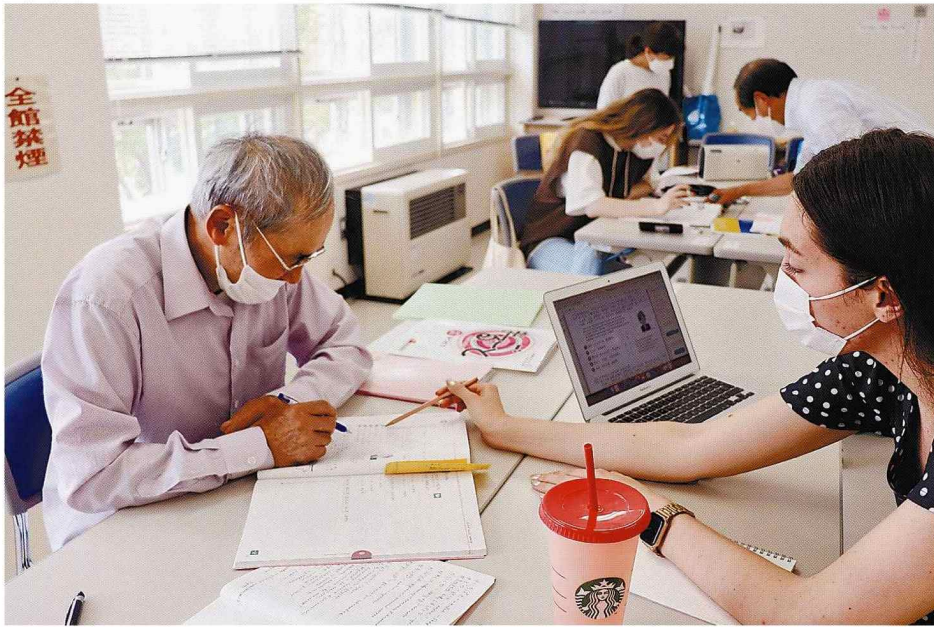
ただ、日本語はほとんど

忘れてしまった。終戦後、名も読めなくなっていた。サハリンで入学した小学校の級友は全員ロシア人。ロシア語が堪能になり、平仮

① 「日本語を覚えたい」

# 生活安定目指し熱心に勉強

に日本語を学び始めた。2人はマンツーマンで教わり、授業のある平日は町内の寮で生活する。ウラジ斯拉フさんは「日本で進学し、デザイン関係の仕事に就きたい」と夢を持ち始め、簡



日本語を覚えようと熱心に勉強する降旗さん。奥は孫のウラジ斯拉フさん。東川町立日本語学校（町提供）

単な漢字も習い始めた。降旗さんも寮で毎日2時間ほど復習している。日本語を話せるようになったら、地域の人と関わりたいと考えている。ただ、「記憶力が落ちて覚えられない。内容は難しくないので」と、もどかしさを抱える。

8月に入り朗報が入った。永住帰国を支援するNPO法人日本サハリン協会（東京）が国に提出するための書類を調べるなかで、降旗さんの両親の戸籍が出身地である長野県に残っていると判明。降旗さんの名前も記載されていることから、分籍して外国人登録を抹消すれば、「日本人」に戻ることができると分かった。

いまは道から提供された団地に入居し、募金や支援